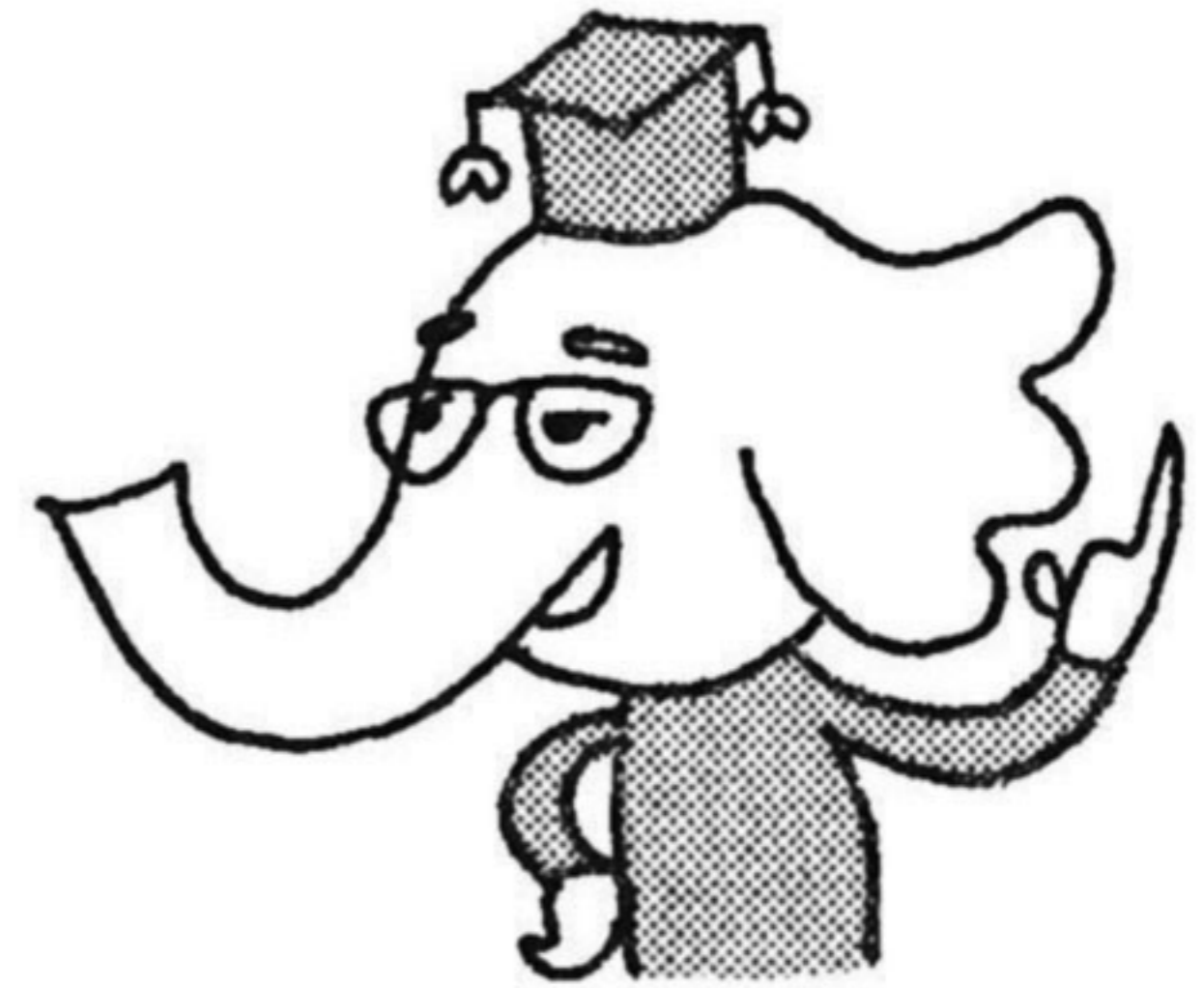


28. 平等に配布できない場合もあることを理解しましょう

落ちつけない被災者、疲れた行政マン、
日夜働くボランティア…。みんなが苦しい
時だから、ある物を分け合い、多少の
不公平も認め合う気持ちが必要だゾウ!!



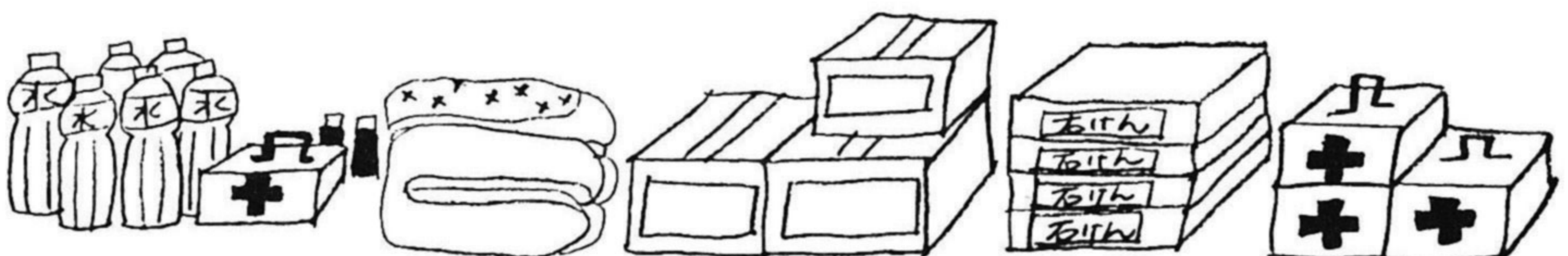
◆ アンケートより

- 大切だと思う。平等にこだわると結局何も出来ない事ってよくあるから。 (女、23才、会社員)
- 平等に配布できないことが当然で、その事をいかに配布される人に分かってもらうかということでしょう。 (女、50才、無職)
- ボランティアに完璧さを要求せず、受け渡しまで多少の行き違いがあったりするような場合でも過度な要求をしないこと。 (男、39才、会社員)
- 平等性や公平性と本当に必要な事情との間にどうしても矛盾がある。しかし混乱があっても当たり前。スムーズに行かなくてもくじけないこと。 (男、49才、公務員)
- 受給者の納得のゆく説明をして配布しよう。 (女、70才、無職)
- どうしても不平等と考える人がでてしまう。その不服を聞き入れてくれる場所も設置すべきと思う。 (女、42才、アルバイト)

▶ 100人の避難所に弁当が90個

兵庫県ボランティア協会 海士美雪氏より取材

「平等」って何だろう。例えば100人の避難所に弁当が90個しかない時、全員に行き渡らないからそれを1つも配らないという意見、これも平等。一方、90個を100人で分けて食べようという意見、これも平等。しかしどちらの方法にも不満が出る。前者は弁当があるのに配られないという不満、後者は分け方が悪いという不満など。震災直後の混乱期では、忘れていた人と人との暖かい関係がよみがえり、人々はすすんで譲りあった。やがて、時がそれを元の木阿弥に…。誰にとっての平等なのか？その最優先することは何なのか？を、瞬時に判断できる人が救援側に必要であると実感した。「善意」「平等」の原理をも揺さぶった地震だった。

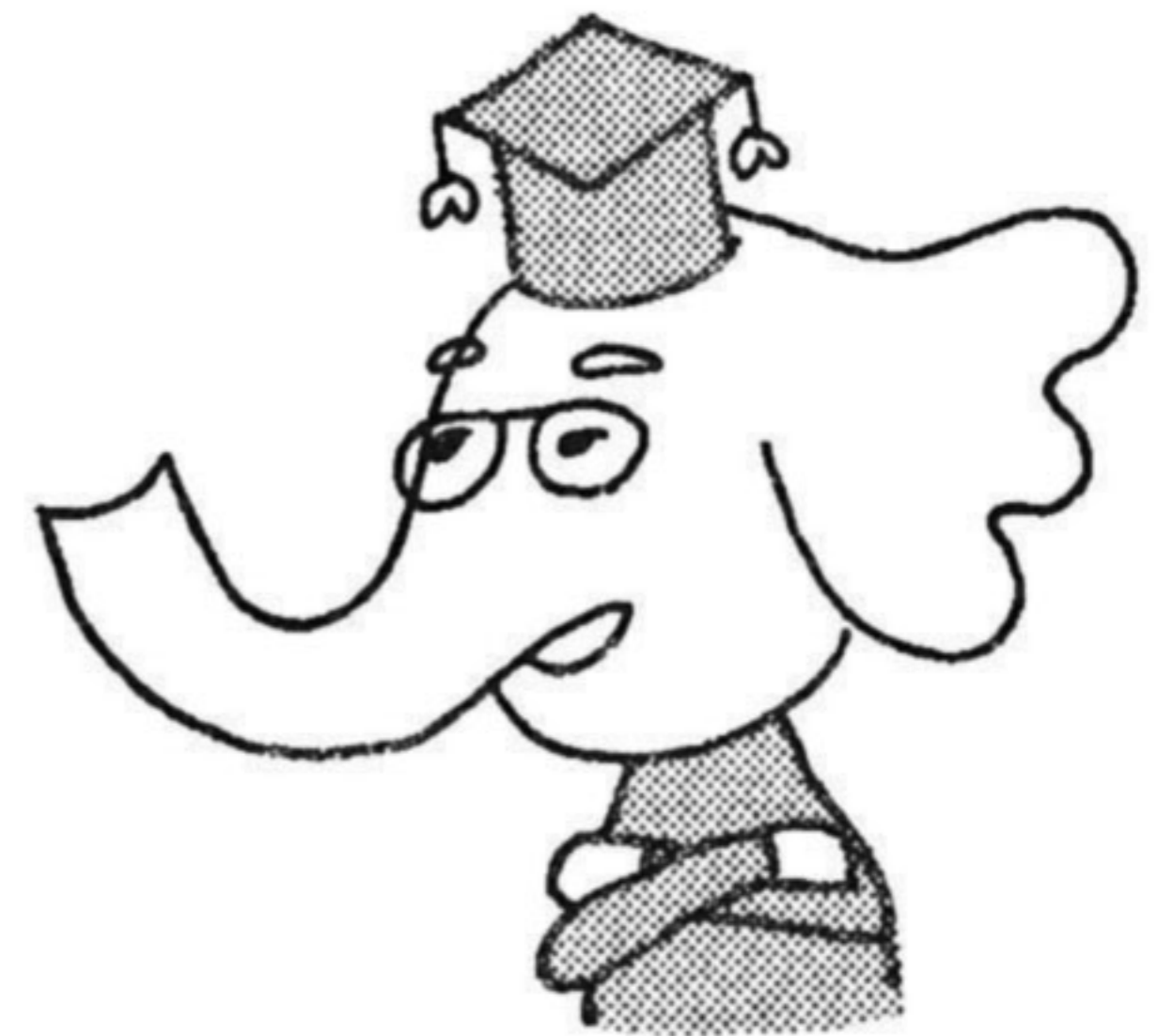


30. 子どもや女性・高齢者に対する配布の方法を工夫しましょう

31. 障害者に対する配布を考慮しましょう

32. 外国人に対する配布を配慮しましょう

“弱者切捨て”が叫ばれている現実社会の中で、むしろ、震災前から存在した問題がはっきりと出てしまった部分がある。普段からのつながりを大切にしたい社会にしていきたいゾウ!!



◆アンケートより

- 乳幼児期に必要なミルク、おむつ、ガーゼなどは、すぐに配給できるようなシステムがあったら良い。
(女、33才、公務員)
- 難しい作業ですね。出来るだけどんな人にも同じ情報が入るよう、色々な場合を考えて伝達に工夫してほしい。
(女、36才、その他)
- 特に障害者、高齢者、定住外国人に対する配慮となれば、日頃のコミュニケーションがなりたっていなければならない。いざというとき真っ先に除外され差別されやすい。
(男、26才、学生)
- 低体温の方が毛布がなくて亡くなられるなどもう繰り返したくない。声を大にして言えない人を特に周囲が気付かおう。
(女、43才、主婦)
- 「生理中の方は生理用品を配りますので集まって下さい」と言われても誰も集まらなかった。
(女、30才、その他)

▶福祉の観点から

愛知県社会福祉協議会 横山明泰

阪神・淡路大震災では、避難所や福祉施設、また御用聞きボランティア隊を通じ、地域にいる被災者に要望を聞いた後、その物資を集め配布した。その中に、次のような物品を希望する事例がありました。(1) 高齢者の方から老眼用のめがね、(2) 身体障害者や高齢者の方からつえ、(3) 補聴器を使っている聴覚障害者から補聴器用の乾電池、(4) アトピーのある幼児のいる家族からアレルギー要素を除去した離乳食など。これは特定の少数の例かも知れませんが、災害の影響を特に受けやすく、避難所などでの生活に支障が生じやすい高齢者や障害者、子どもなどを要配慮者として、救援物資を準備しておくことが必要です。さらに大切なことは、物資配布のお知らせなどの情報伝達方式や、配布の仕方などを特に配慮する必要があると思います。

▶やはり日頃の関係づくりを!!

被災地障害者センター 大賀重太郎

多くの障害者は外出や社会活動への参加の機会が権利として奪われているために、コミュニティから孤立しており、人間関係も非常に薄いのが実状です。したがって、日ごろから地域で、いざという時に助けを求めることができる関係、コミュニケーションの方法を含めて話のできる関係が大切です。本人や家族の配慮というのもあります。

また、障害者は一人一人異なったニーズを持っています。透析の水、車イス用のトイレ、流動食が必要な人など、実に多様です。そのニーズに応える救援者の多様なネットワークも必要です。

出会い、物を介しても「生きる勇気」が感じられる豊かな発想と自主的な行動が求められると感じた体験でした。

▶私たちの工夫が大切

コミュニティサポートセンター神戸 代表 中村順子

災害現場で救援物資を配布する作業は、被災者と応援者の気持ちを結びつける接点づくりの作業です。配布にあたっては、物資を通じて応援の気持ちを伝える工夫が必要でしょう。

私たちの工夫事例として以下のようなことがありました。

- (1) 在宅被災者への水汲み配達では、現地まではポリタンクで搬送するが、自宅内で使用可能な状態、つまり高齢者でも持てるようペットボトルに移しかえて完了するシステム
- (2) 水に対して極度に不安を抱く被災者には、バスタブいっぱいの配水で精神の安定をはかる。
- (3) りんごは滋養に富んだ果物ですが、単に配布するだけでなく、対象者と対面してむきながら話を聞き共に食す。

高齢者、障害者、子供など自力で立ちなおるのに時間がかかったり、サポートが必要な被災者には、物資にほんの少しの「手間」を加えることによりおおきな癒しの効果を生みました。

またこのような日常生活でのちょっとしたふれあい体験が、大袈裟ではなく生きる喜びや明日への希望に直結するのは激甚被災地の特徴でしょう。

▶(株)神戸の日常の課題として

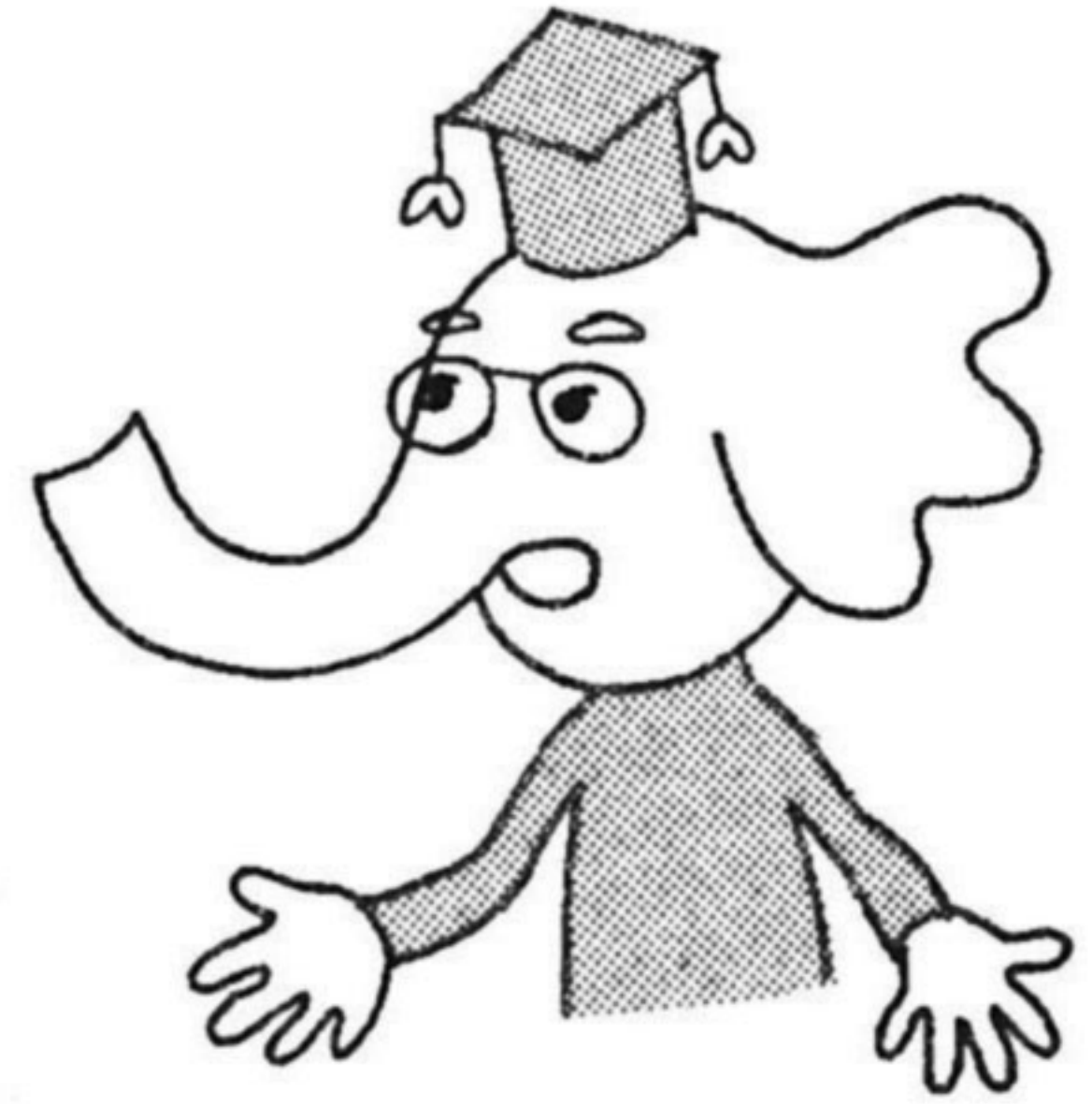
カトリック鷹取教会 神田 裕氏より取材

モノがなかった最初の3ヶ月間程は、普段人と人とをへだてている壁のようなものがなくなり、互いに助け合い、大変な中にもお互いの思いやる優しさが自然に出ていた。その優しさは国籍のちがいをもこえていた。しかし、モノがあるようになってから、また壁ができはじめた。これは、元来的な課題である。国際都市神戸とは、外交上の姿を表しただけで、内なる国際はてんで逆。差別、蔑視があとを絶たない。あるいは異国情緒あふれる街とは、観光地の姿だけで、地域社会での異国は受け入れない。しかし、異国情緒あふれる地域社会は、まちをほんとうの意味で豊かにしてくれる。宗教者として、NGOとして、被災者として、そしてひとりの人間として、外国人と共に暮らしてゆくなかで豊かな心を育んでゆきたい。

◆行政へ

33. 必要な物資に関する正確な情報をまとめましょう

被災地の被害状況等、総体的にまとめられるのは、やはり対策本部を設置する行政ということになる。被災地内外の混乱を防ぐためにも正確な情報のまとめ役を担ってほしいゾウ!!



◆アンケートより

- 避難所（学校）へは供給されたが公園や自宅での被災者に行き届かなかったので、情報を的確に収集する必要がある。 (男、52才、その他)
- 配給の物が各地で異なっていたのが気になります。また「デマ」が横行することもありました。 (女、28才、会社員)
- 早め早めに需要品目情報が広まるシステムがないものか？ (男、24才、公務員)

▶この不公平感を何とかして!!

マイム・マイム 鈴田徳子氏より取材

被災地が発信する情報は実に膨大である。その中から物資ひとつ取り上げても、発信先もさまざま、そして時期によっても内容が異なったりする。これを『まとめる』という作業は、災害対策本部を設置する行政、あるいは社会福祉協議会など、何らかの“公的”といわれる組織が担うしかないが、この意味で今回の震災ではそれらが全く機能しなかったといっている。その結果、たまたま報道されたとか、もともと規模の大きい避難所や仮設住宅に注目が集中し、その一方で、同じ被災者でありながら小規模のそれは、忘れ去られたような疎外感が今なお残る。このあたりは平等を基本とする行政に強い不信感を持たざるを得ない。むしろ小さな点こそカバーすべきなのに。



行政は被災者一人ひとりの気持ちを分かってほしい。また、ボランティアの方々のことも分かってほしい。行政の方は、皆様と同じような体験をしてみてもどうか！
(女、60才、会社員)

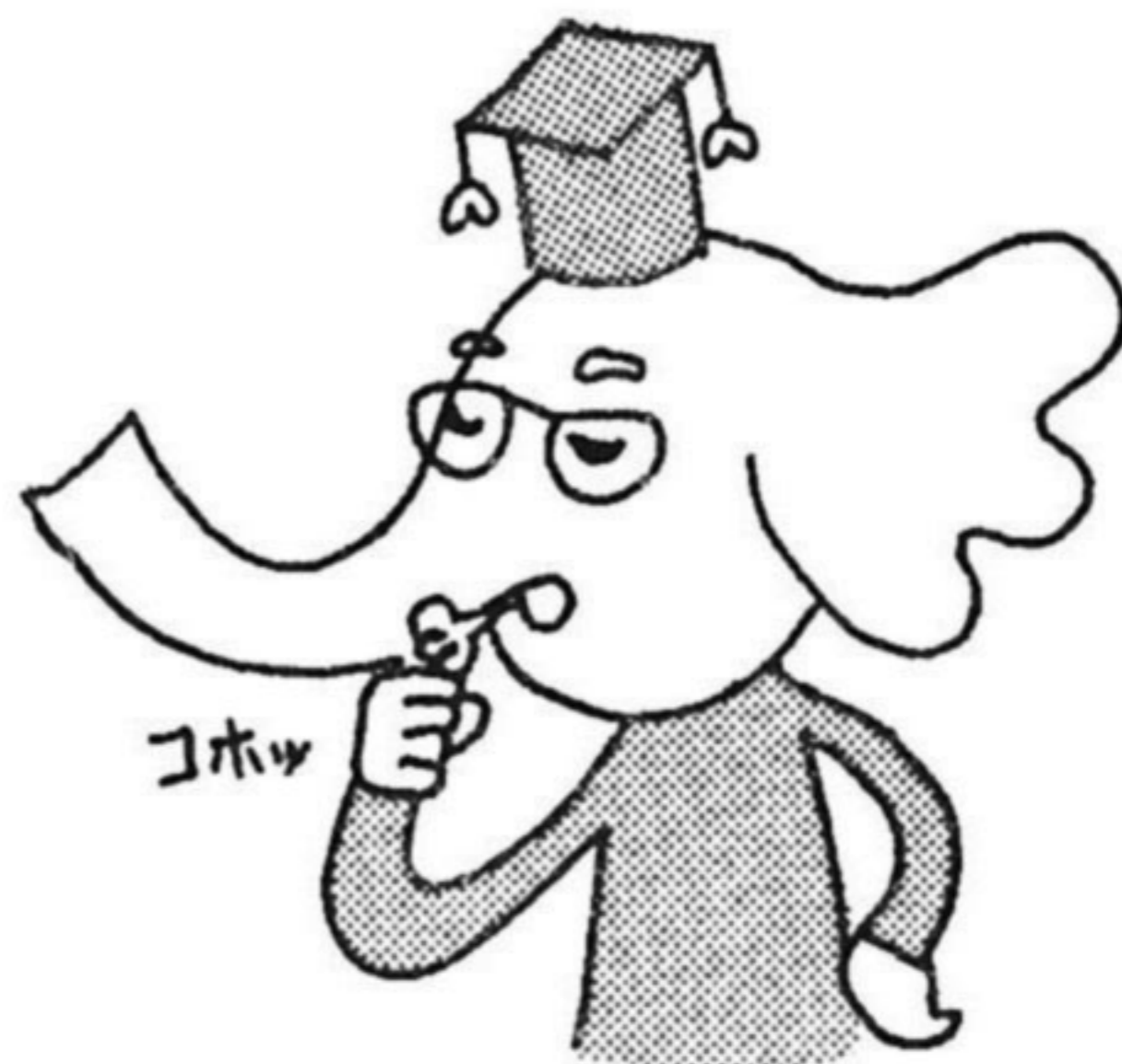
各方面で行政を批判する意見が絶えないが、行政に勤める人も被災者であり、同時に一市民ではないカイ!!改善すべきは行政のシステムなのよ!!



◆行政へ

35. 救援物資の収集・仕分け場所を被災地外に設けましょう

被災地内へ入るのは緊急性の高いものに限るべき。この意味で物資は、本当に必要なものだけ入れればよく、収集、仕分け場所は被災地外に置くべきだゾウ!!



▶被災地外が分担する役割として

震災から学ぶボランティアネットの会 事務局長 栗田暢之

救援物資が直接被災地へ入る問題の第一は、交通渋滞である。人命救助の最も緊急性が高い車の中に、すぐには必要のない物資やボランティアが、同時に駆け付けたことは大きな反省点である。また、仕分け等は本来後方支援だが、災害ボランティアの真髓のごとく黙々と作業せざるを得なかった人々の心労は「被災者との出会いが一度もなかった」という、実に後味の悪いコメントを残す。一方、救援物資は必要となる物や期間がさまざま、地域性の違いも伴う。また復旧した店の営業や、被災者の自立の妨げなど新たな課題も引き起こす。これらを調整する意味も含め、救援物資の収集・仕分け場所は、むしろ被災地外が担う役割だと思う。

善意の物資ありがとう

お米など何とかメド



ミスマッチなどで山積みされたままの救援物資（神戸市北区・兵庫県消防学校）

欲しいのは本、工具

備蓄基地 スペース確保課題に

大地震から十日余りがた。ミスマッチが生じ始めてい。備蓄基地は窮乏になる。阪神、米、毛布など。全国から寄せられる救援物資は、ほぼ充足したとみられる品。被災者の要望の間に、今もたおれぬと到着し、感嘆した。

救援物資の備蓄基地、県消防学校（神戸市北区）と品を詰め合わせた物も多い。グリーンピア三木（三木市）。それぞれ一日にトラック百二十台、七百〜千トンの物資が届く。近隣市町の消防団やボランティアの協力で二十四時間体制で積み下ろしや分類作業を行っているが、基地から被災者のもとに送り出されたのは消防学校で七割、グリーンピアでは二割強。広大なグラウンドには、搬出を待つ物資の山が並ぶ。

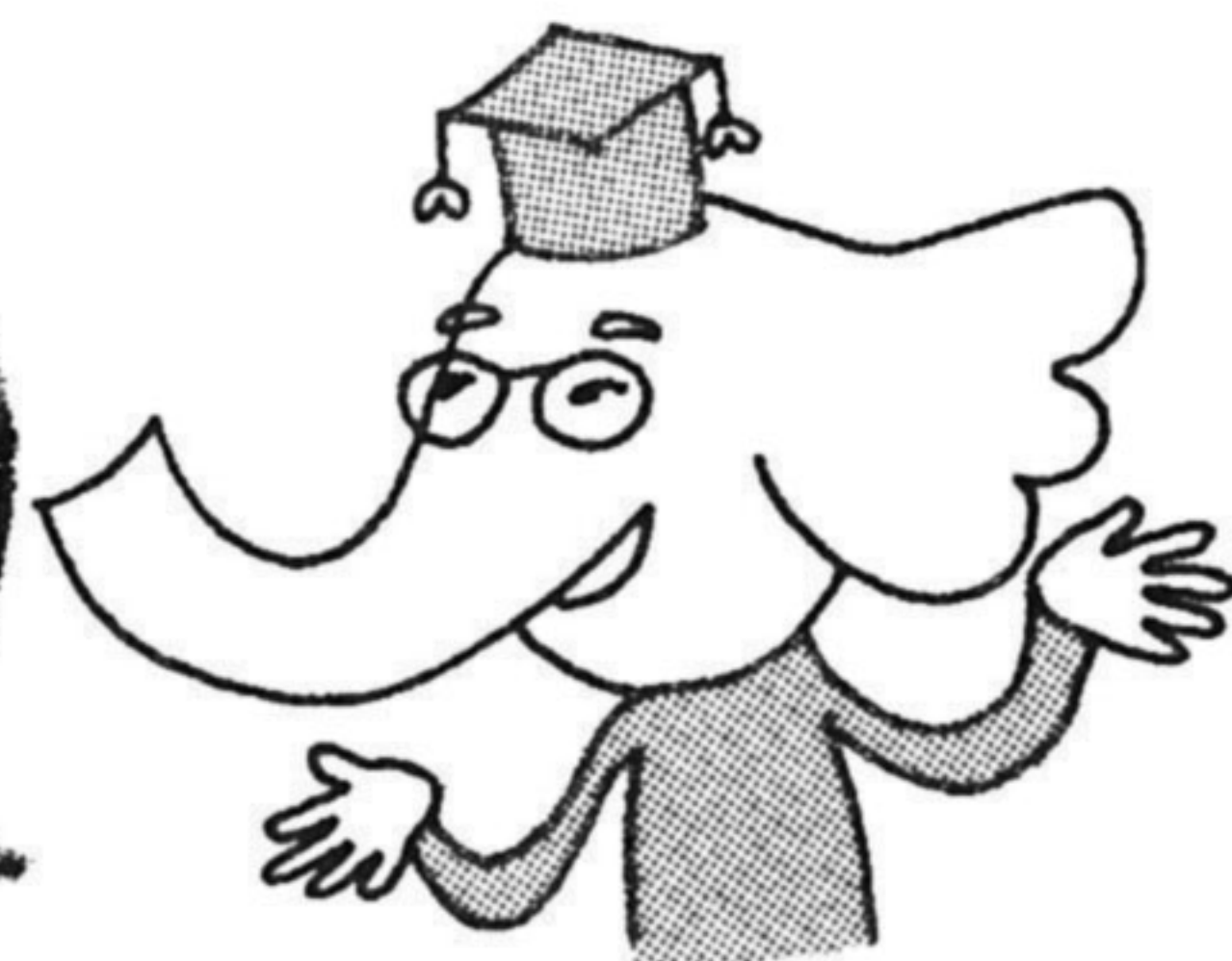
「『強張り』など温かいメッセージ付きの物資は、涙が出るほどありがた。いのだが」と中谷一彦、消防学校長。基地に物資が増え続ける背景について「冷たいおにぎりやインスタントラーメンは、現時点ではあまり喜ばれない。漫画や本、大工道具などの希望が多いが、注文をつけるわけにもいかず」と話す。また、これまでの震災と比べて被災者の数が極めて多いことも、配送を滞らせている原因の一つ。救援物

● 95年1月27日
神戸新聞社提供

◆行政へ

36. 市等に届く物資の配布はボランティアとのパートナーシップを重要視しましょう

当時はボランティアに対してそれほど信頼がなかったこともあって、物資を渡してくれなかったり、面倒な書類の提出を求められたりした。緊急時はもっと臨機応変に対応してほしいゾウ!!



◆アンケートより

- 行政とボランティアの間で救援物資の仕分けや配付などで対立が表面化する事があった。受け入れ側の基本ルールを提示していけば今後の役に立つのではないだろうか。

(男、27才、会社員)

▶互いを認め、もっと連携を!!

長田区役所 中島康裕氏より取材

初動3日間の大混乱期は何がどうだったのかよく覚えていない。しかし気が付いた時には、さばききれない膨大な量の物資が全国から届いていた。今、冷静に考えれば、もっと早い段階でボランティアとの連携を図り、それらの有効利用ができたならと思うが、当時は、ボランティアに対する位置付けが難しく、確かに疑いもあった。やがて共同作業をする中からは、台車で物資や弁当を近隣に運んだ行政マンも出て、互いの信頼関係を築いていった。そして今日、行政の構造そのものは変わっていないので、ボランティアの多くが期待する程の変革は成し得ていないが、震災以前にはあった、行政がボランティアを使うという発想は少なくとも改善されるであろう。

▶行政とのイコールパートナー

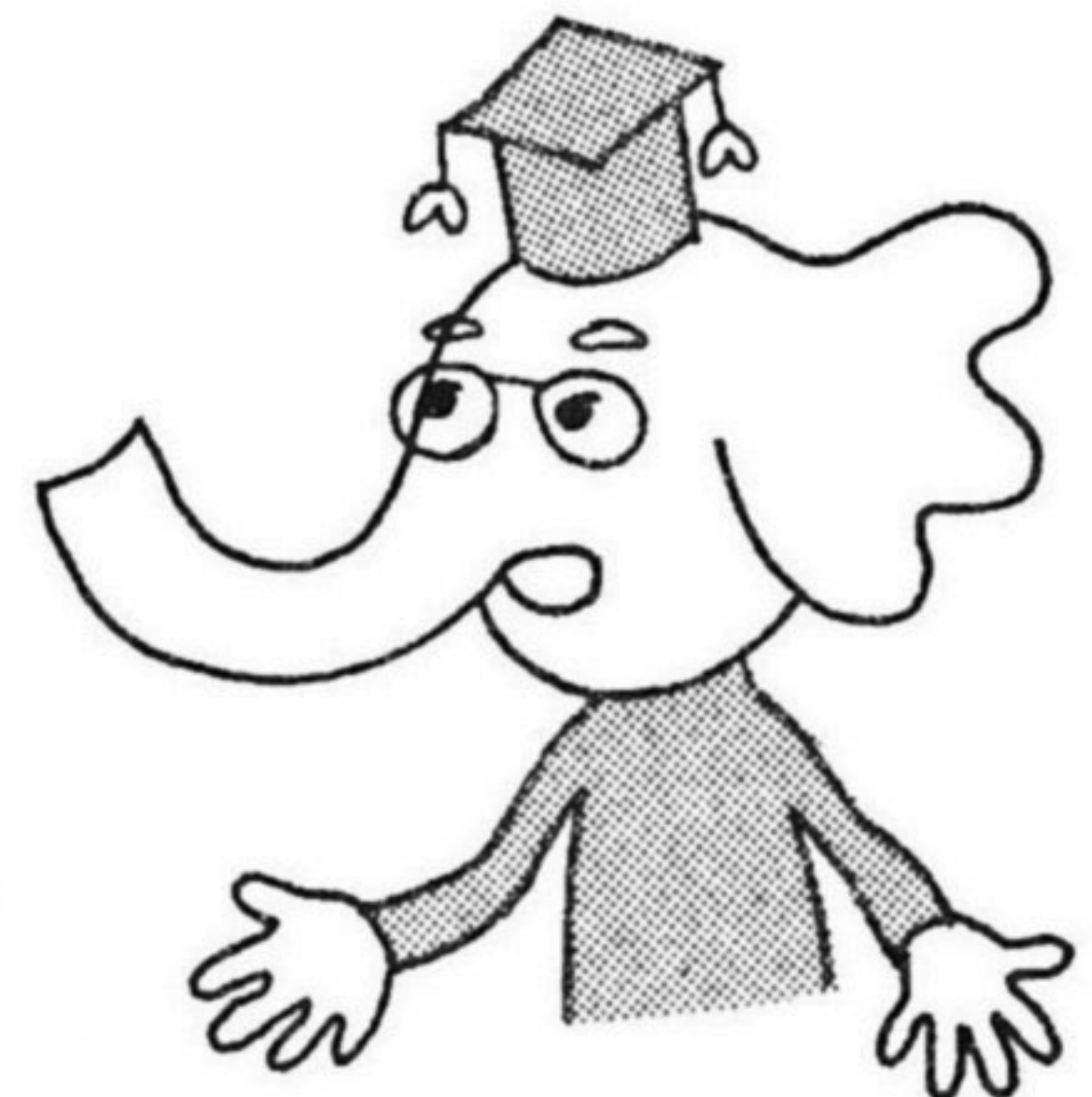
阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会 事務局長 村井雅清

災害時、行政はうまく機能することが出来なかった。それは、行政も同じ災害の被害を受けているからだ。そんな中で、救援活動をよりスムーズにしていくためには、行政はやるべきことを行うと同時にボランティアとの連携も必要になってくるのではないだろうか。震災当初、救援物資の配布には偏りがあった。「避難所」の指定を受けていない場所に避難した被災者には物資の配布が行われなかったためである。もし、行政が持っている物資をボランティアにも提供し、お互いが持っているニーズに関する情報を交換しながら分配を連携して担っていれば、救援活動もより混乱を押しえられたのかもしれない。ボランティアと行政の「情報の共有化」を図ることが、「行政とボランティアのイコールパートナー」として成り立たせる重要な要素ではないだろうか。

◆行政へ

37. 給水車と同じ要領で物資もすみずみまで配布しましょう

要は簡単なこと。給水車のように必要な物資を満載した“物資車”を走らせ、避難所のみならず、被災地のすみずみまで物資が行き渡るようにしましょうという提案だゾウ!!



▶ “待ち”型の配布ではなく…

西宮・地域助け合いネットワーク 牧野史子

物資配布の拠点は、避難所や公園であることが多く、たまたま情報を得ることができた人、また比較的生活に余裕があり、動きのとれる人々のみが物資の供給を受ける機会が多かったように見えた。むしろ本当に物資を必要としている人は、配布場所へ足を運ぶことの難しい高齢者や、倒壊した家屋の処理等でひまもない人々ではなかったか。“待ち”型の配布ではなく、小回りのきく機動力で地縁のコミュニティ組織の情報網を駆使し、柔軟できめの細かい配布（ケアも含めて）がもっとなされてもよかったと思う。地域の中で、日頃から対応能力のあるコーディネータが養成されることがますます望まれる。



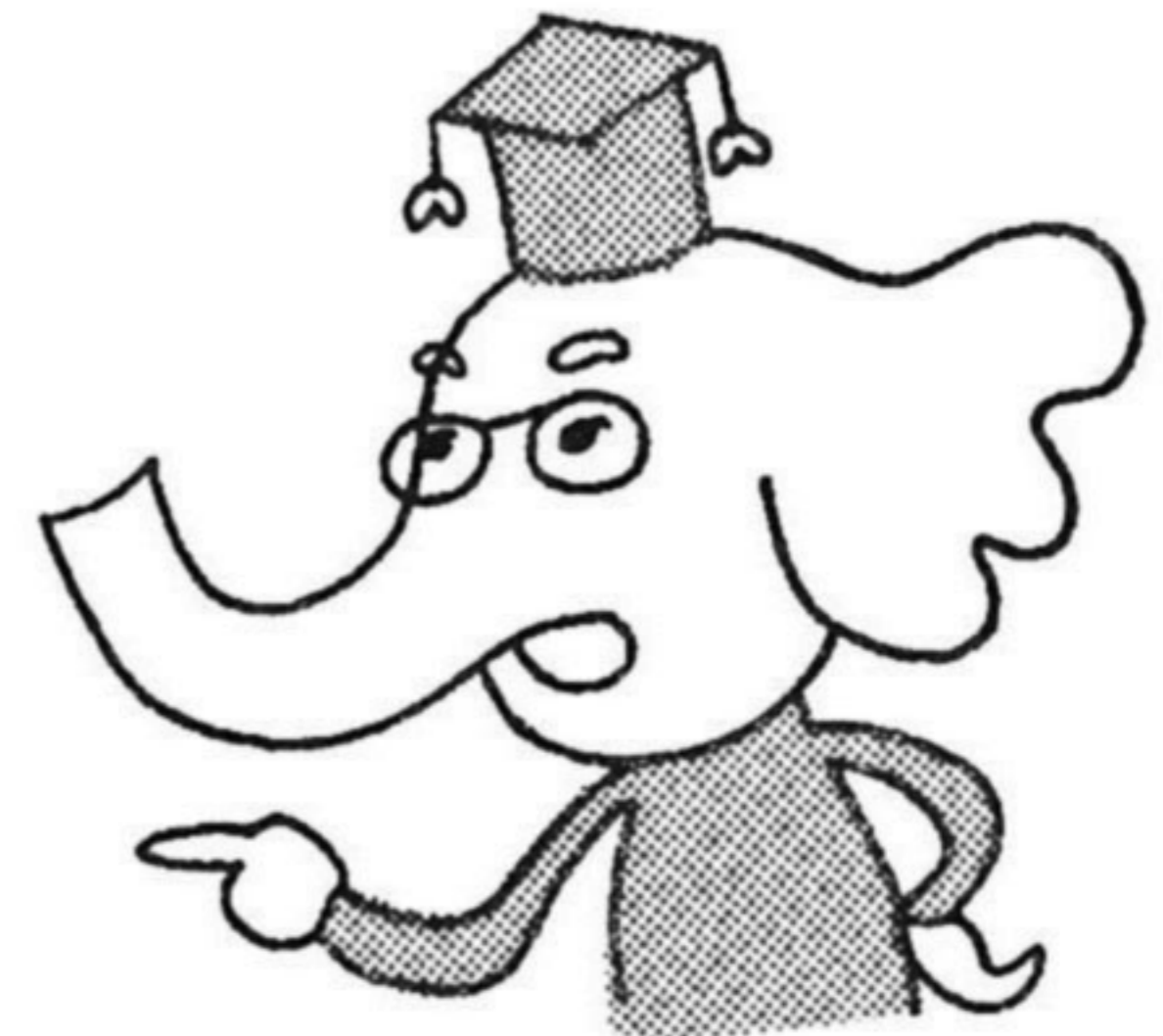
現地の必要としている物資だけが入るシステムを早く構築しましょう!! そうすれば、阪神・淡路大震災で物資の仕分けばかりをしていた多くの労力と時間が、今度は被災地一戸一戸、被災者一人一人のもっときめの細かいニーズに応えられる力になるんじゃないカイ!! つまり、すみずみまで配布できることにつながるよね!!



◆報道へ

38. 必要な物を正確に報道しましょう

マスコミの影響は大きい。それだけに、よほどの注意を払ってもらう必要があるゾウ!! 災害対策本部などと連携して、偏りのない情報提供に努めよう!!



◆アンケートより

- 地域によっては救援物資の供給が非常に少ないところもあって、マスコミが取り上げた場所は余るほどの物資が届いたり格差があった。(女、53才、無職)
- 報道は正確に。情に走り過ぎてはいけない。(不明)
- TVは有力な媒体である。単に物資を受け付けている情報だけでなく、事細かい物資の内容、配布状況、現地で迷惑していることなど、随時伝えてほしい。(女、49才、主婦)

▶震災報道を担った一記者として

神戸新聞社社会部 記者 石崎勝伸

震災直後、一部の避難所の状況が繰り返し報道されたことで、救援物資の集まり方に偏りが出たことは事実あった。一方で被災の全体像のみでなく、一部の避難所の変化を定点的に取材したり、各社が異なる視点で被災した人たちの状況や思いを詳細に報道することによって、読者や視聴者にはリアルに伝わり、世界中から支援が寄せられたのもまた、事実だと思う。被災時であればこそ多角的な視点が必要となり、ピーク時に一千カ所以上あった避難所のすべてを同時に報道することは事実上不可能である。ただし、被災した人たちに対する「どこにいったら、何が手に入る」「ここではこれを求めている」といった情報は、もっと積極的に交換すべきではなかったか。

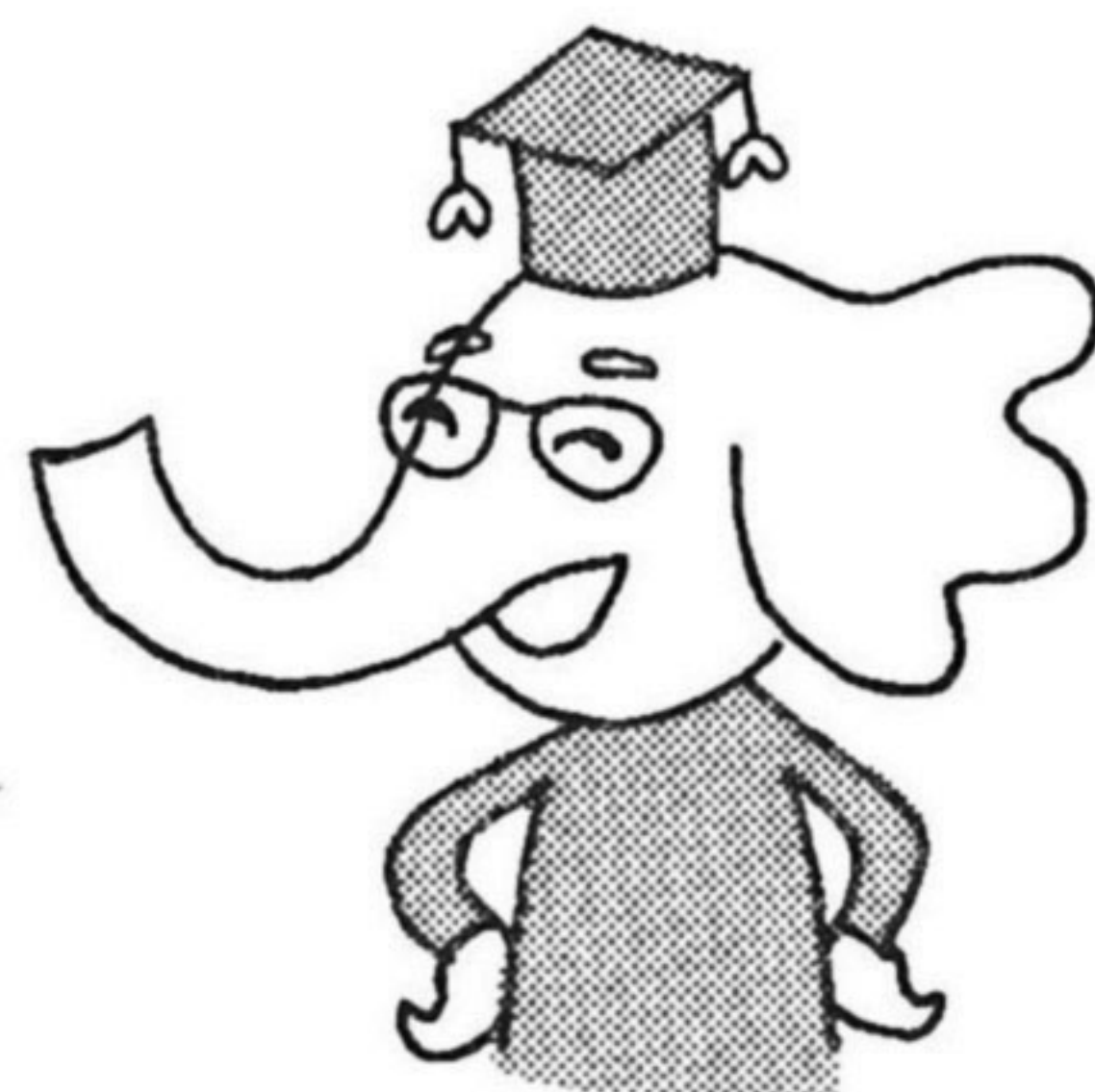
一口メモ

毛布や寝具、下着、タオルは、新品又はクリーニングの物でないと、体や心が救われません。友人の物なら平気又は暖かさがよりプラスされるのですが、ふつうの救援物資はつらいです。傘や帽子ならともかく。「救援物資の毛布が前のより暖かったので今も大事にしてるのよ。」という老人の方がいます。どうせ送るのなら自分が古い物をもう1年使うつもりで、新品を買うか、比較的新しい品を譲るのがマナーではないか。ゴミのような物を区役所で整理しました。情けなかった。(女、43才、主婦)

◆企業へ

40. 自社製品の提供などを一層推進しましょう

企業の社会貢献が本格化してきた。だからもっともっと協力してね!! とりわけ物資に関しては同じものが一度に、大量に入手できる魅力は企業ならではのことで。期待してるゾウ!!



◆アンケートより

- 各企業と事前に協議してもらい、個別に提供出来る「物品、人材、ノウハウ、資材など」を登録する制度が出来ればよい。 (女、50才、公務員)
- 携帯電話、テレホンカードなどの無料配布。公衆電話の増設が必要。 (男、29才、公務員)
- 提供するときに、企業名のPRを条件付けることはやめましょう。 (女、38才、自営業)
- ゆうパックの無料化同様、宅配便についても無料運送や協力的活動を期待する。 (女、24才、会社員)

▶それぞれの立場を理解し合い、協働体制を!

日本NPOセンター 田尻佳史

[企業への提案]

緊急時に素早い対応を行うためには、支援できる内容や体制をあらかじめ検討しておくことが必要です。また、平時から社会貢献活動などを通じて、市民活動団体やボランティア推進機関などの幅広い団体とコミュニケーションを取っておくことが、有効な支援につながります。

[市民活動団体への提案]

企業に支援(備品提供等)を願い出るには、団体の趣旨や活動の目的等の説明を行い、その意義や内容を理解し、協力してもらうことが必要です。緊急時といえども一方的に無理な依頼や要求をするのではなく、協働関係を作り上げていくことが有効な支援につながります。

[システム化の提案]

大規模災害であるほど、物資の量も大量になり、企業だけが経費を負担することが難しくなるでしょう。そこで、緊急時に大量の物資を迅速に集め、配布するには、国(行政)と企業そして市民活動団体との間で、買い取りの条件や配布の方法等を検討し、マニュアル化しておくことが必要でしょう。

朝鮮民主主義人民共和国支援の実践から

▶ 自分がもらっても嬉しいものを送ろう!!

震災から学ぶボランティアネットの会 金澤浩子

私たちが救援物資について検証作業を行っている間、「朝鮮民主主義人民共和国に救援物資を送ろう」という活動に衣類の集積地として協力することになった。その時に用いた仕分け手順を紹介します。これは、それまでの検証作業で得られた情報を基に、私たちが考えたものです。(P18も参照して下さい)

○物資の受け付け…Aゾーン

伝票をはがし、カンパを取り出し、「住所、電話番号、名前、カンパの金額、個数」を控える。伝票はひとまとめにし、保管しておく。

○衣類の仕分け

①Bゾーン…箱や袋から物資を取り出し、サイズ、種類、男女に分けてたたむ

Point *たたみ方を統一する。

*シミ、汚れ、虫食いがあるものは、ボタンやホックを外して廃棄処分。

*下着、靴下、おむつ、おむつカバー以外の新品は袋から出し、値札を外す。

*クリーニング済みのものは、袋から取り出す。

*マジックで名前が書かれているものは送らない(刺繍は外す)。

*ほつれているものやボタンが取れているものは修繕する。

*ポケットの中身に注意する。

*ズボンの裾あげはしない。

②Cゾーン…Bゾーンで仕分けた衣類を「サイズ、種類、男女」別に段ボールに隙間ができないように詰める

Point *段ボールはサイズを統一する。

*あらかじめ、札(サイズ、男女、種類)を段ボールに貼っておく。

*一杯になったら、その段ボールに入っている枚数を数える。

*札をはずし、新しい段ボールに貼り、元のところに置く。

③Dゾーン…新品の段ボール、使用済み段ボール、処分品を整理しながら置いておく

④Eゾーン…枚数を数えた段ボールの重さを量り、リストを作成する

Point *「サイズ、男女、種類、枚数、重量」をリスト表に書き込む。

*リストを基に、内容表(通し番号、サイズ、男女、種類、重量)を書く。

(今回は送付先がはっきりしていたので、2枚を縦横2面に貼付した。)

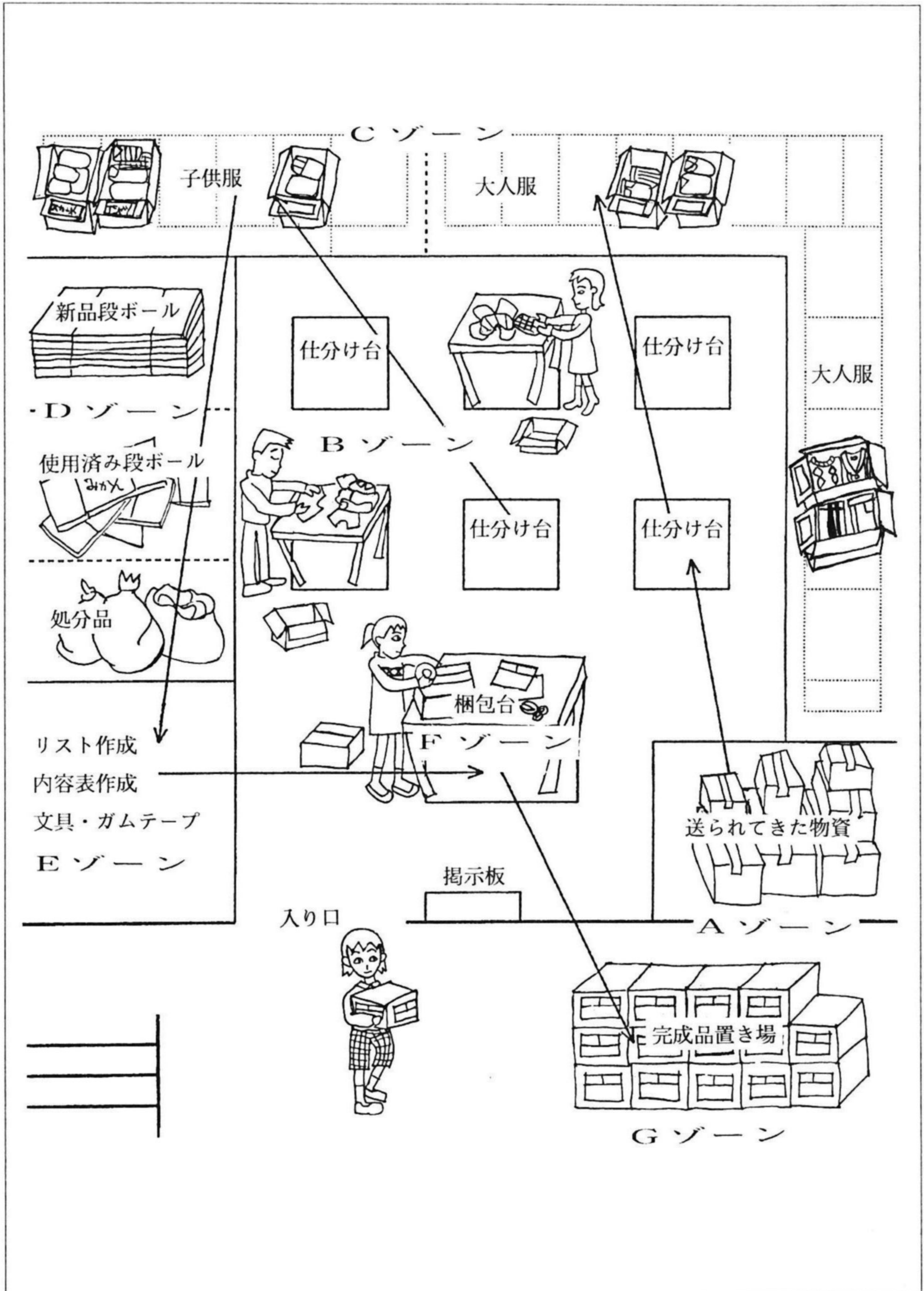
⑤Fゾーン…段ボールに封をし、内容表を貼付する

Point *段ボールの形を整えながら封をする。

*内容表をガムテープで側面に貼る。この時、ガムテープが重なったり、内容表にかかったりしないように気をつける。

⑥Gゾーン…完成品を番号順に積み上げる

◆仕分け見取図（同朋大学朋儕館3Fホールにて）



島原・神戸方式の提案

